

Title	<批評・紹介>策彦入明記の研究 牧田諦亮著
Author(s)	小葉田, 淳
Citation	東洋史研究 (1959), 18(2): 213-216
Issue Date	1959-10-01
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/148142">https://doi.org/10.14989/148142</a>
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

批評・紹介

策彦入明記の研究

牧田 諦亮 著

A5版・上巻三九六頁附圖一枚・下巻三四七頁・索引一頁・上巻昭和三十年十月・下巻昭和三十四年三月・法藏館發行

天龍寺塔頭妙智院には、同院三世策彦周良が天文年間遣明船の副使及び正使として兩度明國へ渡航した關係から、策彦自身の渡航記録をはじめ室町時代の日明關係についての重要史料を多數傳藏している。遣明船を中心とした文献として、瑞溪周鳳の善隣國寶記のよくな編書も逸することはできないが、その直接的な記録としては、享徳二年東洋允澎を正使とした遣明船の記録である笑雲の「入唐記」、南海通記所収の天文十六年の策彦正使の遣明船に對する「渡唐船法度條々」など二、三を除いては當時の公卿・僧侶・武家の日記・文書中より断片的なものを探集するほかはない。従つて妙智院所藏の史料を除外しては殆んど遣明船の問題などを論究することは思いもよらぬことである。

牧田氏は昭和二十二年以來、妙智院の記録類の書寫校訂と、策彦を中心とする研究とに従事し、その成果を昭和三十年十月に上巻とし、同三十四年三月に下巻として公刊した。

即ち上巻には次の如く妙智院所藏の記録類を収める。

- 一、策彦和尚初渡集
  - 二、策彦和尚再渡集
  - 三、謙齋南遊集
  - 四、渡唐方進貢物諸色注文
  - 五、策彦和尚一番渡唐・二番渡唐
  - 六、大明譜
  - 七、驛程錄
  - 八、圖相南北兩京路程
  - 九、於定海并舉山下行價銀帳
  - 一〇、圓通樓帳
  - 一一、陳白・小回向
  - 一二、雜錄
  - 一三、大明別副并兩國勘合
  - 一四、戊子入明記
  - 一五、壬申入明記
  - 一六、補遺
- 右の内、策彦入明の直接の記録としては、一、二、四、五、六、九などで、このほか三は兩度の入明時に策彦が詠んだ詩を入明記等より後人が集録したものであり、七は寧波より北京までの驛名・里程を記し、かつ名勝・風物についても注記しており、寧波で歸國の船を待機中、嘉靖十九年小春初五日に書かれたものである。さらに一三、一四、一五は策彦が渡航に當つて先例を明らかにし、かつ明地における行動、明の官僚との折衝等に參照するため、以前の遣明船關係の記録類より抄出させたもので、殊に一五壬申入明記の如きは策彦の自筆にかかるものである。また一二、一六は明の文人等が策彦に與えた送行その他の詩文類である。
- さてこれらの記録類は、明治十八年修史局において影寫し、影寫本は現在東大史料編纂所に藏置されているが、大正十二年六月、大日本佛教全書遊方傳叢書第四の内にその大部分は收載刊行された。即ち初渡集・再渡集のほか、入明諸要例として、前述の番號數字をもつて記せば一四、一三、四、五、六を収め、また妙智院文書抄の題目下に送行等の關係文書の一部を集めている。さらに入明記卷初事文集記と題して、初渡集・再渡集の卷初に記した備忘記を集載し

た。なお、續史籍集覽第一冊には、一四、五、九、七が収載されているが、不完全でまます省略されている。

大日本佛教全書本は主として史料編纂所影寫本を底本として、嚴密に原本と照合されていない。いな、殆んど原本との對校は省略されたといつてよい。牧田氏の刊本が、全く原本によつたことはその價值を決定的に高からしめるものといえる。事實、これを佛教全書本と對校してみると、容易に本書の高い信憑性を見出すことが出来る。

ここに収められた諸記録は、日明交通という觀點よりいつて、いずれも重要なものであるが、就中白眉というべきものは策彦自筆の初渡集・再渡集であろう。實は、自分は昭和三十一年度の大学院演習として、幸いこの上巻が出版されたので、初渡集の講讀をもつてあてた。ところで、その演習單位のレポートとして、東洋史學專攻の竺沙雅章君が「策彦入明記の研究上における訂誤」と題する一文を提出した。今、この竺沙君の報告の一部を參査し、自分の氣付いた二、三の點を添えて、訂誤について若干の意見を記すことにする。本書では句點は、名辭を列記する場合に・を使用するほかは、すべてを・をもつてしている。そこで讀點と句點の區別がはつきりしないから讀み方について判然としないような場合も出てくることはやむを得ない。また句點について明らかに誤植と思われるものがある。

(上段刊本)

例1 吾船泊三山拱。候良久不至。四六頁

2 其件目開具于別楮列位大老大

人。察生等遠來之誠九〇頁

吾船泊三山。拱候良久不至。

其件目開具于別楮。列位大老大。

大人。察生等遠來之誠。

3 經林中花史・園中花。九五頁

4 貳號船頭池永新兵衛・盛田新左衛門來賀。二〇二頁

經林中花・史園中花。

貳號船頭・池永新兵衛・盛田新左衛門來賀。

次に上表文などに見る「内開」「欽之」或は「除外」等の語の使用の場合に、句點が適切でないことが往々にある。

例1 抄蒙欽道提刑按察司副使盧老尊牌面内。開本日二十二日。五〇頁

2 只照常例。賞給欽此。欽遵擬合就行。爲此除外。所據。頁一二七

抄蒙欽道提刑按察司副使盧老尊牌面内。開。本日二十二日。只照常例賞給。欽此欽遵擬合就行。爲此除外。所據。

誤字、脱字と見られるものがある。或はこれは多く單なる誤植であらうと思うが、

例1 趁此海不揚波。四四頁

2 圍予者三盤。某決勝者二盤。一三頁

3 風北。故出船。二〇〇頁

4 又潮候二二〇頁

5 消拜者五。扣頭者而止。二五五頁

趁此海不揚波。

圍某者三盤。予決勝者二盤。

風北。故不出船。

又候潮候

消拜者五。扣頭者三而止。

しかし、以上のような錯誤乃至誤植のあることは、この種の刊行物には免れ難いことであるから、決して著者責むべきことでない。ただ、右のような事例はこのほかにも多少見出されるが故に、他日重版の際でも訂誤を加えられたならば幸いである。

下巻では妙智院所藏記録に基く策彦を主とする研究が第一章より第六章までを占め、第七章は漂海録三巻の撰者崔溥の傳記と漂海録

の解説とにあてられ、最後に漂海録を収載している。

第一章、第二章は策彦の傳記で、細川氏の老臣井上宗信の第三子に生れた策彦が、永正六年十二月鹿死寺にて心翁等安の門に投じ、同十五年に等安が妙智院に住して天龍寺を置するに及んで、策彦もこれに従い、妙智院にて剃髮戒を受け、二十二歳で師を失つた。大内義隆の請をうけてその主宰した天文兩度の道明船の役者となり、初渡は博多新竊院の湖心碩鼎の副として、再渡には策彦自身が正使として、幾多の曲折を経てその任を果した。歸國後は彼の聲譽は大いに揚り、弘治元年ごろ武田信玄の懇請により一か年ほど甲斐に赴き、その後上洛した織田信長も彼を遇すること甚だ篤きものがあつた。しかし彼は謙齋雜稿を通じて觀られるように、西山に靜居して釋をたしなみ聯句に耽ける境涯を喜んだよう、天正七年六月晦日妙智院に歿している。本書には彼の生涯が詳細に考記されており、また、その法系を論じて法曾孫蘭室玄森の撰になる「前住圓覺策彦良禪師行實」を附載している。

室町後期の道明船については、細川・大内兩氏がその獲得を争つたことは有名な事實である。細川氏に由縁の深い出自の策彦が、却つて大内氏の船の副使・正使となつたことについて、牧田氏は策彦が最も恩顧を蒙つた細川高國の歿後は細川氏の勢力いよいよ分裂し京師騷擾に陥つて、細川の當主晴元は策彦など相手にせず、一方博多の碩鼎が正使に選ばれ、碩鼎はかねて道交の深い策彦に事實上の正使の實務を依頼したものであろうという。この牧田氏の見解は頗る肯綮にあたるもので、賛成である。その他、寧波より北京まで沿途の敘述については、蘇州虎丘塔・寒山寺・大運河以下の寫眞を添え、また牧田氏自身が戦前戦後に踏査した個所も多いので、頗る生

彩あり自分には興味深くかつ有益であつた。

第三章は策彦入明記の系譜と題し、初渡集・再渡集その他の寫本の流傳及び佛教全書本について解説する。第四章五山文學史上の策彦は、策彦の本領は聯句類にあるとして、策彦が江心承菴と天龍寺山内で九千句を唱和したものに、入明のとき寧波第一の文人豊解元の序文を得た城西聯句を解説し、また近時京都某書肆で見出されたという永祿十二年五月廿三日の日附のある漢和聯句を紹介している。この漢和聯句は里村紹巴と策彦とが五十句ずつ詠じたものである。策彦が兩度の入明に、贈與或は購入によつてもたらした中國書籍は、極めて多數であつたといわれぬが、その中に佛典といふべきものは一つもないことを牧田氏は指摘している。それと同様に策彦は寧波・北京或は沿途の名山古刹を多く訪ねているが、それはいわば觀覽の範圍にとどまり、緇徒との教義信仰上の交りというものはない。これは彼が非常な憧憬と慇懃とをもつて積極的に中國の文人に接したことに對比される。

第五章策彦入明記にあらわれた明佛教においては、著者の豊かな佛教史の智識を背景として、策彦が訪れた諸山、例えば寧波の補陀寺・延慶寺・天寧寺、杭州の保俶塔、姑蘇城外の寒山寺、鎮江の金山龍游禪寺以下の策彦の記事の解説と、寺傳や縁起が添記されている。策彦は、これらの諸山について堂塔伽藍の様子や、安置された佛像名や、さては堂内の對聯・扁額類、或は碑石や壁間の辭句に至るまで、實に丹念に記録している。しかも僧院の制度や組織、或は寺の經營問題などには殆んど關心を示さない。これらの點は措くとしても教義や信仰上の問題について積極的に求めようとするのは不思議と思われるほどである。

遣明船は朝貢船として定まつた儀禮とそれに示されているいわば使命がある。しかもその實質的な主目的は貿易の利である。そして限定された日限内に、限定された行動をもつて、これを果さなければならぬ。

宋元時代、または極く明の初期にかけての時代、中國に渡つた禪僧は數年乃至十年、二十年の長期に亙り彼地に滯留したものが多く、室町中期以後、いわゆる五山文學というものも全く衰退したといわれる。詩文の形式的な模倣や、辭句の智識としての累積が主となつてきたのが、その原因の一つであらう。掉尾の五山文學を代表するといわれる策彦も「生硬粗雑」であると、五山文學史稿の著者北村澤吉氏は酷評している。策彦等の入明において、折角名山大刹を歴遊しても、いわゆる上國觀光の域に止まり、また彼地の文人との交友といつても兩三回の筆談や、一、二の詩文の交換に過ぎなかつたことも止むを得ないといふべきであらう。しかも彼等は中國歸りとして大いに歓迎されたのである。室町季世の五山文學や五山の宗教的活動の性格も、またこれに通うものがあつたといえよう。

最後に漂流録三卷は、崔溥が濟州島より成化二十四年正月全羅道に赴かんとし浙江南部に漂流し、ついで大運河を経て北京に上つた顛末を記したもので、策彦より約五十年前、同じ行程をとつた記録である。崔溥が北京を發し京城近く青坡驛に達したとき李朝成宗の命で漂流中の一行四十三人の日録を撰集したので、宣宗二年に至つて公刊された。陽明文庫所藏の右の朝鮮刊本等によつて印刷した。これによつて策彦の記録と對比することが出来る。

(小葉田 淳)

## 老莊的世界

——淮南子の思想——(サーラ叢書二一)

金 谷 治 著

一九五九年一月

平樂寺書店發行

二五九頁 三八〇圓

この書はサーラ叢書の第十一冊として書かれたもので、叢書の企畫自體が、最初から著者に對して執筆上の一種のわくを課している。それは新しい研究の内容を盛りながら、平易で興味深い讀み物となるように、という要求である。讀者は先ずこのことを承知した上で、これを批判しなければならぬ。この要求を充分に満足させることは、決して容易な業ではなく、そこに著者の苦心もあれば、讀者の異見も存することと思うが、しかしこの目標自體は、現代の要請に即した正當なものであることは言うまでもなからう。そして私の讀後感としては、この書はこの意味においては可なり成功した好著であつて、著者の勞を多としたい。

著者は斯學の新鋭で、研究の面においては近年最も旺盛な活動をつづけている一人である。もとより本書においては、この叢書の性質から来る制約もあつて、未だ必ずしも重厚深遠な研究を望み得ないが、筆端に清新の氣が溢れ、活氣ある平明な叙述がよどみなく進行しているのが嬉しい。

次に讀者は、中國哲學界の現状に照して、このテーマの取り上げ方や扱い方が何を意味するものであるかを、大略把握しておく必要がある。現代の中國哲學研究が、少くともその第一線においては、既に完全に漢學の舊套を打破して新しい分野に切り込んでいくこと